

TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI) 広報誌

衣服の研究現場より

# 服をめぐる



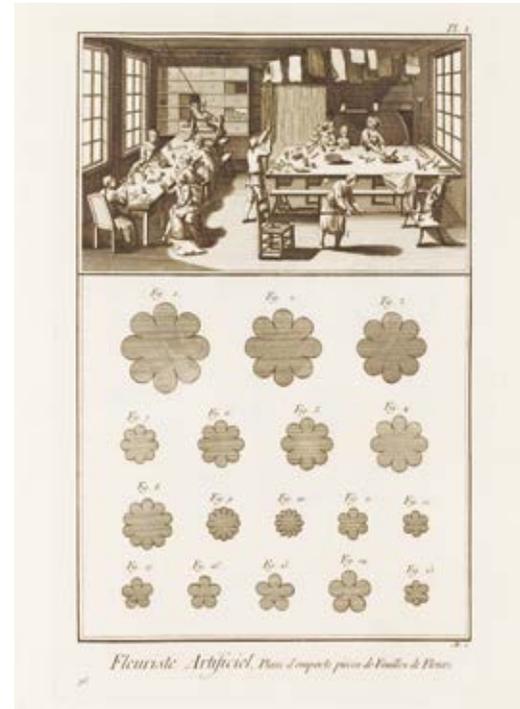
一人一品

漫画家

まんきつ

28

2026.02



ディドロ、ダランベール編纂  
『百科全書、あるいは科学、技術と工芸の理論的辞書』  
(*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*)より

「造花」

1770-78年 京都服飾文化研究財団所蔵

本書は人文科学、自然科学、応用科学など諸事象における約6万項目が収録された百科事典です。18世紀フランスの啓蒙思想の集大成として刊行された本書は、啓蒙思想家ドゥニ・ディドロとジャン・ル・ロン・ダランベールを中心に、モンテスキューヤルソー、ヴォルテールといった著名な哲学者も執筆に携わり、20年以上かけて編纂されました。本巻(文字頁)17巻と図版集11巻で構成され、図版は細かく彫られた銅版画で表現されています。本頁の上段は、造花を作る作業場の様子です。当時は絹や木綿、麻の生地、薄紙や羽毛といった様々な材料で造花が盛んに作られました。女性の服や頭を飾る造花には生地製のものが多く、糊付けした生地を型抜きやハサミで切り、着色するなどして繊細な細工が施されました。本頁の下段は、生地に模様を型押しするための木製の道具で、大小様々な形の造花が作られていたことが分かります。

服をめぐる 28

- 一人一品  
漫画家×KCI  
まんきつ  
「ファッションは誰のために？」  
50歳のミニスカートとシャネルの精神」 p4

KCI Wunderkammer  
カラーステイ p12

地産街道を行く 28  
フランス漆ものがたり(後編) p14

今日の補修室 第28回  
衣装展示の舞台裏② p20

学芸員の虫眼鏡  
捺染 p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展、「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌『Fashion Talks...』の発行を通じて公開しています。

Website <https://www.kci.or.jp/>

Follow us !!



京都服飾文化研究財団  
公式インスタグラム

@theyotocostumeinstitute



一人一品 漫画家 × KCI

# まんきつ

Mankitsu



著名人がKCIの収蔵品を観察し、各々の表現方法で作品を制作する「一人一品」。  
今回のゲストは、漫画家のまんきつさんです。

まんきつさんは埼玉県出身、日本大学芸術学部卒。日常に潜む違和感や自身の体験をユーモアたっぷりに描くエッセイ漫画が、さまざまな世代から人気を集めています。  
彼女の作品の主軸となっているのが、「美容」と「心身のメンテナンス」への深いこだわりです。作中では、最新の美容施術や健康法、ダイエットなど、美しさを追求するストイックな生活を公開。その徹底した探究心や、時に失敗する姿をあげすけに描く赤裸々な語り口が、多くの読者から「面白くてためになる」と支持されています。また、サウナとの出会いから心身を整えていく過程を描いた『湯遊ワンダーランド』（扶桑社）は、サウナ愛好家のバイブル的存在となり、2023年にはTVドラマ化も果たしました。

主な作品に、『そうです、私が美容バカです。』（マガジンハウス）、『犬々ワンダーランド』（扶桑社）、『ハルモヤさん』（新潮社）など。  
アンティークの洋服を好んで着られることが多いという、まんきつさん。今回は、「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団（KCI）コレクションを中心に」（三菱一号館美術館、2025年10月11日～2026年1月25日）にお越しいただき、1920年代の服飾作品をご覧になりました。そこで得た印象をもとに、まんきつさんならではの視点で漫画を制作いただきました。

## まんきつさんが訪れた展覧会

### 「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心に」展

会場 三菱一号館美術館（東京・丸の内）  
会期 2025年10月11日（土）～2026年1月25日（日）  
主催 三菱一号館美術館、京都服飾文化研究財団



撮影/KCI

「ファッションは誰のために?」  
50歳のミニスカートと  
シャネルの精神」  
まんきつ

「服をめぐる」を  
お読みのみなさま  
はじめまして  
漫画家まんきつ  
50歳です

半世紀を生きた今  
私には一つの切実な  
しかし、世間的には  
無謀な欲望がある

ミニスカートを  
履きたい…

50歳だけど  
ミニスカートを  
はきたいーい  
はきたいーい  
はきたいーい

と、叫び出した  
衝動をおさえ  
私は鏡の前の現実に  
立ち尽くす

…  
理性がささやくのだ  
「年相応であれよ」と…

「そのヒザを見ろよ」と

私を出さ  
ないで、

そんな迷いを抱えて  
今日ここに来た

1920年代  
女性の服が  
劇的に変わった  
時代の展覧会へ

ようこそ本日  
案内させていただきます  
筒井です

KCI  
キコレター  
筒井直子さん  
よろしく  
お願いします

うわあ  
かわいい

これが  
フランスの  
モードです  
すべて  
オートクチュール  
です

繊細、

オートクチュールって  
よく聞くけど  
高い服って  
ことですか?

オートクチュールは  
フランス独自の  
産業なんですよ

顧客のために  
採寸して  
オーダーメイドで  
仕立てた服で

デザイナーさんの  
指示でお針子さん  
たちが一点一点  
手作業で縫いあげる

フランス  
ならではの  
最高峰の  
服作りなんです



ポール・ポワレが『コルセット捨てようぜ』と提案してハイウエストのドレスやパンツルックを作ったり…

でも当時は『女が街でズボンを履くなんて』と、まるで犯罪者扱いタビーの中のタビーでした

「スポーツ」など特定の目的のためであれば許容されていた（スキューエア）



わっ、かわいいシヤネルだー

やっぱこの時代といえばシヤネルですね

『犯罪者扱い…それに比べたら私が50歳でミニスカ履くなんて誰にも迷惑かけてないし逮捕もされない…あれ？私の悩み、ちっぽけすぎない？』



でも実はシヤネルは1925年のアールデコ博覧会そのものには積極的に関わってないんですよ

パリの他の有名デザイナーはこぞって参加したのに

えっ 何で？



では時代を少し戻しましょう 20世紀初頭の 下着です

細フツ 内臓どーなってんの!?

19世紀半ばからこの頃まではウエストが細ければ細いほど美しいという価値観でした



西洋ではさかのぼること数百年の間 女性のコルセットは常識だったんです

拷問じゃん

その呪縛を完全に解いたのが 第一次世界大戦

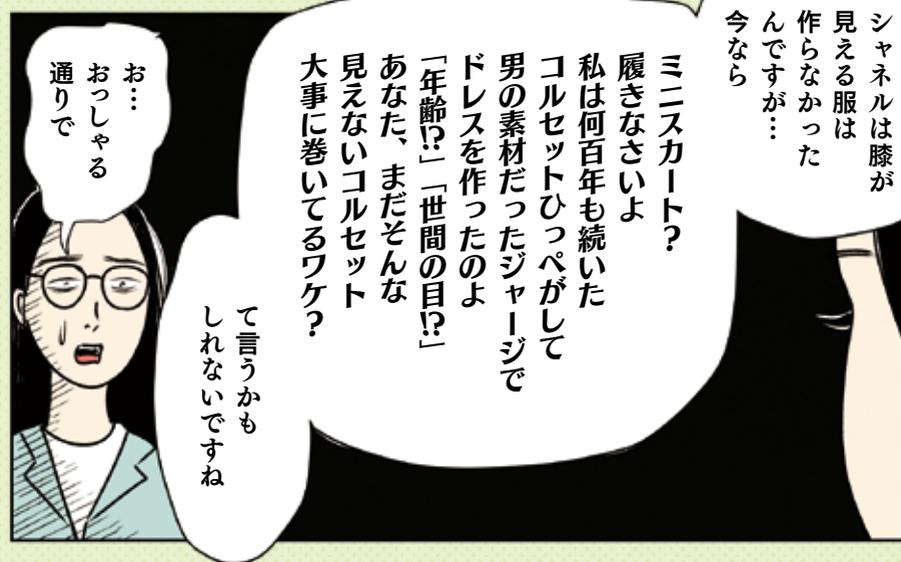
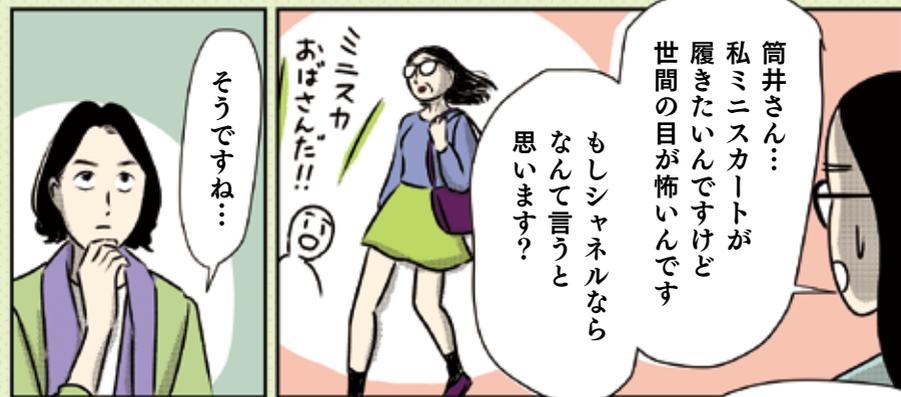
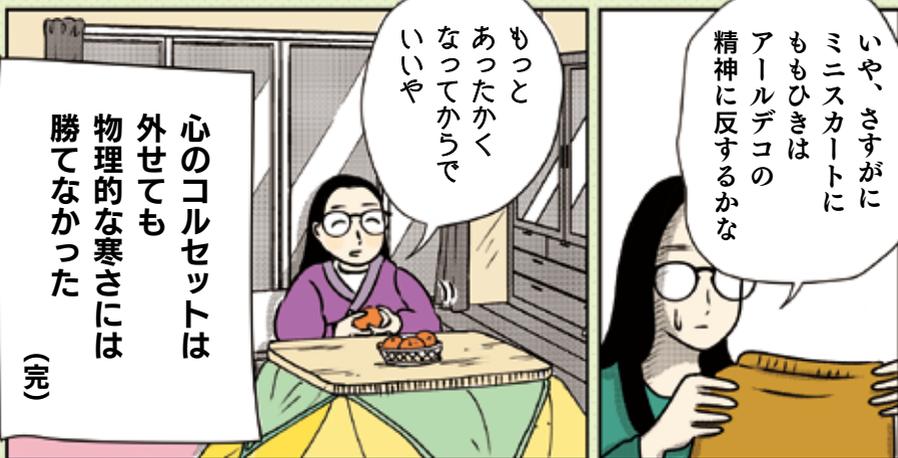
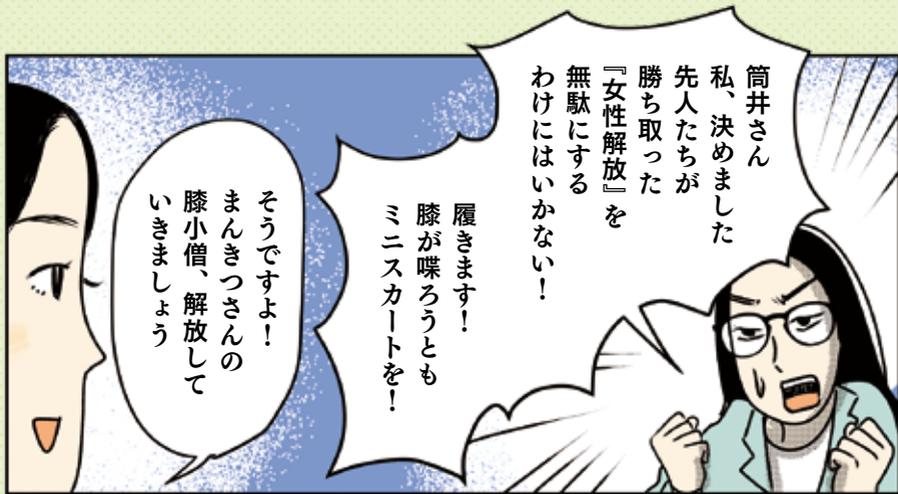


男手が足りなくなり 女性も社会に出て 働かざるを得なくなっただんです

コルセット 巻いてたら 仕事に ならんわ！ 長いスカートも じゃま！

コルセット 外れた理由が 壮すぎる…

※アールデコ博覧会 (正式名称/Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes (現代産業装飾芸術国際博覧会))





## カラスステイ

素材：スチール、絹糸  
原産地：欧州、あるいは米国  
製作年：1910年頃  
京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

ゲジゲジとした針金に艶やかな絹糸が巻かれている。触ってみると、けっこう硬く頑丈だ。いったい何に使うのか…。今から120年ほど前、欧米の女性が着る昼間の服に高い立ち襟が流行していて、首にびったりと沿うのがお洒落な着こなしだった。ところが、それらの襟はレース製が多く、自立し難かった。へなへなの襟では格好が悪い。そこで考案されたのが、襟をきれいに立たせるこのカラスステイ。襟の内側に何本かを縫い留めて使用した。当時の広告によると、このゲジゲジは襟の高さに応じて引っ張って伸ばしたり、縮めることもできる。目立たず、どんな首にもフィットする優れものなのだそう。(筒井)



カラスステイの一例

出典：『Comedia illustré』誌（1910年4月15日号）より  
京都服飾文化研究財団所蔵



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

——そこはまさに「驚異の部屋」。

# フランス漆ものがたり(後編)



前編はこちらから

今回の「地産街道を行く」は前号から続く後編として、2025年10月から2026年1月にかけて三菱一号館美術館で開催された「アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心に」展に関連し、1920〜30年代のパリで活躍した工芸家ジャン・デュナン(Jean Dunand, 1877年-1942年)の作品とその時代のモードを取り上げます。KCIの収蔵品を手掛かりとしながら、早稲田大学 社会科学総合学術院の朝倉三枝教授にお話を伺いました。

## 工芸家と服飾デザイナー 漆によるコラボレーション

**KCI** 前号(『服をめぐる』27号)では工芸家、ジャン・デュナンが漆芸作品を生み出すに至った経緯とその作風についてお話しいただきました。とても興味深かったです。

**朝倉** 見せて頂いた彼の作品には金属やプリント写真に漆を塗布したものがありません。どれも完成度が高く美しかったですね。  
**KCI** 前号のお話では、デュナンが服飾デザイナーの肖像画を手がけた、というお話がありました。デュナンと服飾デザイナーたちとの関係について、もう少し詳しく教えてくださいませんか？  
**朝倉** デュナンはさまざまなデザイナーと関わりを持っていましたが、その中でも特に深いつながりがあったのが、帽子デザイナーのマダム・アニエスです。本名はアニエス・リトゥネール



(左) 早稲田大学 朝倉三枝教授、(右) KCI キュレーター 筒井直子



(図1)  
マダム・アニエス《帽子「革命」》  
帽子装飾：ジャン・デュナン  
『ロフィシエル』誌 1924年8月号(個人蔵)



(図2)  
「1925-2025 アール・デコ100年」展に展示された  
ジャン・デュナン制作の帽子(1925年)。フェルト地  
のうえに卵殻が漆で接着されている。(筒井撮影)

(Agnes RITTNER)といます。1920年代以降、パリのモード界で活躍した人物で、デュナンとのコラボレーションが確認されている最初の事例の一つが、1924年に発表された「革命(Révolution)」という名前の帽子(図1)です。  
**KCI** 帽子に三角形の飾りがついていますね。  
**朝倉** はい。その三角形の装飾部分をデュナンが手がけました。金属の上に幾何学模様を漆で描いたもので、金属と漆の組み合わせという点でも非常にデュナンらしい作品です。日本人の感覚では、漆は木材に塗るものと考えがちですが、デュナンは金属に漆を施すことで新しい質感を生み出しています。そこには素材に対する鋭い感性が感じられますね。  
**KCI** 前号ご紹介したコンパクトケースやバックルも、金属の上に漆を塗ったものでした。  
**朝倉** そうですね。あのコンパクトにも使われていた「卵殻技法」を、デュナンはマダム・アニエスの帽子にも応用しています。フェルト地の帽子を漆でコーティングし、そこに卵殻技法を用いて幾何学模様を描き出しました。  
**KCI** 同じ技法を使った帽子が、パリの装飾美術館での「1925-2025 アール・デコ100年」展(2025年10月22日〜2026年4月26日)に展示されていて、100年を経た今もきれいに貼りついた状態で残っていることに驚きました(図2)。とても精緻な技法で、デュナンの丁寧な仕事ぶりがうかがえます。マダム・アニエスとのコラボレーションは他にもあるのでしょうか？  
**朝倉** はい。たとえば、雑誌の表紙でも2人は共演しています。『ロフィシエル』1926年6月号に掲載された金属製のプレスレットは、デュナンの作品です(図3)。それから、こちらの画像に



(図5)  
コートの裏地に使わ  
れたデュナンがデザイ  
ンしたテキスタイル

KCI 收藏品

マドレーヌ・ヴィオネ [推定]  
(テキスタイルデザイン: ジャン・デュナン)

### コート

1925年頃  
京都服飾文化研究財団所蔵、林雅之撮影



(図4)  
モデル、帽子: マダム・アニエス  
アクセサリ、布地、表紙デザイン: ジャン・デュナン  
『ロフィシエル』誌 1927年5月号表紙 (個人蔵)



(図3)  
モデル、帽子: マダム・アニエス  
アクセサリ: ジャン・デュナン  
『ロフィシエル』誌 1926年6月号表紙 (個人蔵)

あるプレスレットとネックレス、そしてこの生地も、デュナンによるものです(図4)。

**KCI** 漆をスプレーで吹き付けて仕上げたと言われている生地ですね。

**朝倉** そうです。実はデュナンは1925年にテキスタイル工房をパリに開き、布地の制作も行うようになっていたのです。さらに、デュナンは雑誌の表紙デザインそのものも手がけています。幾何学模様を用いた典型的なアール・デコ風のものから、日本美術の影響を感じさせるもの、さらにはアフリカ美術にインスパイアされたデザインまで、非常に幅広い意匠を自在に展開しています。

**KCI** 今、アフリカ美術の影響のお話がありました。1920年代当時、アフリカ由来のデザインが数多く登場していますよね。

**朝倉** そうですね。1924年から1925年にかけて、フランスの自動車メーカー、シトロエン社が企画した「クロワジエール・ノール(黒い大陸探検)」というアフリカ縦断旅行が大きな話題となりました。その様子はドキュメンタリー映画として公開され、大きな反響を呼びました。マダム・アニエスもその映画に触発されて、「クロワジエール・ノール・コレクション」という帽子のシリーズを発表します。このコレクションは発表後、フランスやアメリカの複数のファッション誌で取り上げられ、大きな反響を呼びました。

**デュナンのテキスタイルデザイン**

**KCI** こうして見ると、ジャン・デュナンの活動の幅広さには本当に驚かされます。漆芸家であり、金工作家であり、さらにグラフィックデザインまでも手がけ、そのどれもが非常に高い水準に達している。そんな多彩なデュナンの仕事の中から、もうひとつご紹介したいのが、KCIが所蔵する1925年頃のマドレーヌ・ヴィオネ作と推定されるコートです。

**朝倉** 裏地には、植物模様の美しい生地が使われていますね。

**KCI** はい。金と銀のラメ糸を使ったジャカード織りのテキスタイル(図5)です。リヨンのテキスタイルメーカー、デュシヤルヌ社製です。リヨンのメーカーは、しばしば優れたアーティストにデザインを依頼していましたが、本作は同社がデュナンにデザインを委嘱したもので、デュナンによるテキスタイルデザインとしては非常に稀少な例とされています。

**朝倉** この植物模様は、蓮の花でしょうか?

**KCI** はい。デュナンは蓮の意匠を好み、家具の装飾などにもたびたび取り入れていたようです。実際、パリ市立衣装美術館が所蔵する1925年制作のウォルト店のドレスは、この裏地と同じ模様で、色違いの生地が使われています。

**朝倉** この裏地は「織り」ですが、デザインや配色、そして金糸の輝きが、どこか漆芸作品を思わせます。また、こうした美しい柄を裏地に用いるという点は、日本の羽裏を連想させるような、日本的なたずまいも感じられますね。

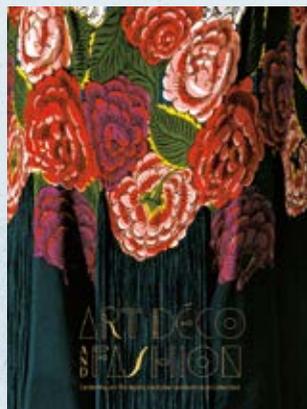
**KCI** 当時の衣服の中には、着物に似たフォルムのものも多く見られ、日本の影響を受けたデザインが随所に見られます。裏地に柄物を用いるという発想も、着物の仕立てから着想を得たのかもしれないですね。ところで、このようにデュナンは、自身のデザインを他社に提供することがよくあったのでしょうか?

**朝倉** 私の知る限りでは、ほかにそうした事例は確認されていません。先ほども述べましたように、デュナンは1925年に創設した

(図7)  
 藤田嗣治がルシュール社に提供したテキスタイルデザイン。  
 A.Calavas 編『PARIS 1929』(Librairie des arts décoratifs)より(個人蔵)



(図6)  
 『アール・デコとモード 京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションを中心に』展図録  
 三菱一号館美術館発行 2025年



「アール・デコとモード」展でのコート(P.17)の展示  
 (KCI撮影)

自分の工房で、布地に直接、漆を施すタイプの布地を制作していましたが、テキスタイルメーカーへのデザイン提供はデュシヤルヌ社のみです。なお、デュシヤルヌ社はアーティストと積極的にコラボレーションを行っていたことでも知られています。

**KCI** それは興味深いですね。たとえば同時代の画家ラウル・デュファイは、ピアンキニロフエ社というテキスタイルメーカーにデザインを提供しており、その数は4000点にもものぼるといわれています。それほどまでに、当時のテキスタイルは芸術的な表現の場とされていたわけですね。

**朝倉** それに、画家の藤田嗣治もテキスタイルメーカーにデザインを提供しています(図7)。

**KCI** はい。デュナンやデュファイ、藤田のテキスタイルについては『アール・デコとモード』展の図録(図6)に朝倉さんが論文としてまとめていただきました。充実した内容でとても勉強になりました。

### 日本とフランス、美意識の融合

**KCI** これまで、KCIが所蔵するデュナンの作品を中心に、1920年代アール・デコ期の装飾について朝倉さんにお話をうかがってまいりました。ご覧になっていかがでしたか？  
**朝倉** デュナンは漆芸の道を歩み出す際に、日本人の菅原精造から技法を学びました。そのため、日本の影響は確かに見られますが、彼の漆芸作品をよく見ると、単に習得した技をそのまま踏襲したのではなく、彼自身の美意識に基

づいて再構成された、まったく独自のデザインに昇華されています。その点がとても興味深く感じました。

**KCI** 「単なる踏襲ではない」というご指摘にはまったく同感です。19世紀後半から西洋では、日本の美術や文化を取り入れる「ジャポニスム」が流行します。初期の段階では、日本からの文物や様式をそのまま用いたり、形をなぞったりすることが多く見られましたが、1920年代に入ると、その段階はすでに過ぎ去っていました。もはや「引用」ではなく、日本のエッセンスを抽出し、それをフランスの美意識の中に溶け込ませながら、洗練された造形として提示するようになっていきます。デュナンは、そうした抽出と再構成の「匙加減」が非常に巧みな芸術家だったのだと思います。

**朝倉** 技法は同じでも、美学の土台が全く異なる中で、新たなかたちの美をつくり出していく時代になっていくわけですね。同じように、アフリカの美術なども巧みに取り入れていきますよね。色彩や素材感といった要素を抽出し、自分たちの美学に基づいて新たなかたちを生み出していく。その動きは、デュナンの作品にもはつきりと現れていると感じました。

**KCI** そうですね。そういった視点をもつことで、アール・デコ期の装飾芸術をより深く理解することができるように思いました。本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

聞き手・筒井直子

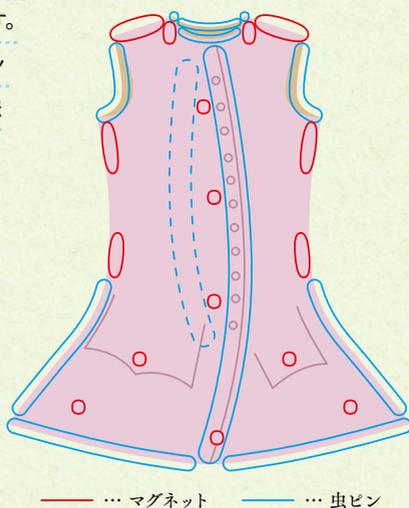


1 虫ピン

2 綿布で包んだ  
マグネット

マグネットと虫ピンの  
留め付け位置

ジレの劣化状態や重さ、生地の高さによりパネルへの留め付け方法が異なります。本展では、絹糸で縫いとめる、マグネットで挟む、虫ピンでとめる、という方法を採用しましたが、今回はマグネットと虫ピンを主な方法に選んだ事例をご紹介します。また、フラットな見せ方ではありますが工夫をしないと張り付いたようにみえてしまうため、身頃の内側にポリエチレンシートを仕込み、ジレ本来の雰囲気や風合いがより伝わるようにしました。(寺川茜)



STEP 02

前身頃と後ろ身頃間にポリエチレンシートを仕込んで、マグネット(B)を置き、マグネット(A)と挟み留めます。

後ろ身頃

STEP 01



マグネット(A)

パネル

STEP 01

パネルにマグネット(A)を留め付けます。

前身頃

STEP 02



ポリエチレンシート

マグネット(B)

TODAY'S RESTORATION ROOM  
今日の補修室

第 28 回

衣装展示の舞台裏②

今回はジレのパネル展示の事例をご紹介します。



男性用ジレ(ウエストコート) 18世紀 京都服飾文化研究財団所蔵  
「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展 熊本会場 撮影/KCI

2024年秋より京都、熊本、東京を巡回した展覧会「LOVE ファッション—私を着がえるとき」ではマネキンを用いない衣装展示を行いました。今回は18世紀の男性用ジレ(ウエストコート)をパネル展示した方法をご紹介します。この展示方法だからこそ伝わる織柄や刺繍の細部の美しさ、製作年代による形の変化を効果的に見せることができました。

## item

なっせん  
捺染

製作者：不明  
製作地：不詳  
製作年：1835年ごろ

白い綿平織り。茶、赤、青の捺染。ジゴ袖。  
袖山と胸にギャザー。

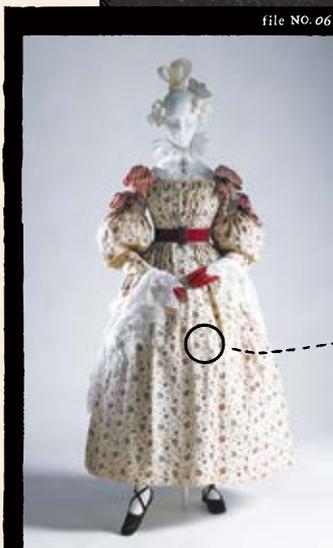
## note

可憐な小花柄が一面に散らされたデイ・ドレス。用いられているのは「更紗(チンツ)」と呼ばれる、木綿に文様を染めた生地です。表面に近づくと、小花の輪郭線の外側へ赤や青の染料が生地の繊維に沿ってにじみ出ていることがわかります。細く均一な輪郭線と、その外側へわずかにはみ出す色。まず銅製のローラーで輪郭線を刷り、その上から木版で赤や青の色を一色ずつ重ねていったことがうかがえます。文様の繰り返しから、横26.5cm×縦35.5cmの木版ブロックと12cmの銅製ローラーによる捺染の掛け合わせであることが分かります。

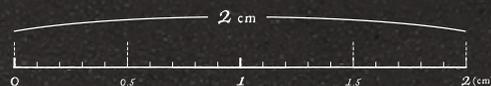
1600年の東インド会社設立以降、インドで作られた更紗が盛んに欧州へもたらされるようになると、軽やかで機能的な綿の着心地と華やかな色柄が人気を呼び、人々の間に急速に広まります。その後、18世紀後半の産業革命を経て、欧州では綿布の製織と捺染がともに自国内でも行われるようになり、更紗はドレスやインテリアとして親しまれました。(五十棲)

▶膨らみのあるジゴ袖と細いウエストに、ロマン主義が広がった1830年代特有のシルエットが表れている。小花と実を配した更紗の生地が、軽やかな装いを演出する。

京都服飾文化研究財団所蔵  
林雅之撮影



file NO. 06



肉眼では見えにくい収蔵品の細部に、  
学芸員の視点から迫ります。

## 学芸員の虫眼鏡

## KCIギャラリー展示

「原由美子＋KCI「女の背広」展」が  
開催中です。

原由美子氏は1970年代初頭よりフリーランスのスタイリストとして、書籍の執筆やファッション賞の選考委員など多方面で活動。KCIは1988年以降、原氏が実際に着用された服を度々受贈し、計57点を保存しています。本展では原氏の寄贈品より、主に仕事着として身にまわってきた約20点を展示。原氏は「どこへ行き、誰と会い、どのような立場でそこにいるのか。雑誌の仕事では、多様な人々と場面にふさわしい装いを提案しながら、自分自身にとっての「基本となる服」を探し続けていました。そうした思いの積み重ねのなかで選び取られてきたのが、今回展示されている仕事着です。」と語ります。「背広」という言葉を懐かしむ方々や、馴染みのない若い世代の方たちも、ぜひお越しください。



「スタイルを見つける」より  
撮影：木寺紀雄

- 会期** 2025年12月1日(月)～2026年4月24日(金)  
**開館時間** 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)  
**休館日** 土・日・祝日 \*ただし3月20日(金・祝)は開館  
**会場** KCIギャラリー \*86m<sup>2</sup>  
 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103 株式会社ワコール京都ビル5階  
**入場料** 無料

詳細はこちらから



## 服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第28号  
 2026年2月28日発行

## 発行

公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)  
 〒600-8864  
 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103  
 株式会社ワコール京都ビル内  
 電話：075-321-9221  
 ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、五十榎亙、木下ミルチ  
 (京都服飾文化研究財団)

デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子、川口芽依 (Neki inc.)  
 写真：成田舞 (Neki inc.)



本誌バックナンバーはこちら  
<https://www.kci.or.jp/publication/public-relations-magazine/>

## KCIの出版活動から

研究誌『Fashion Talks...』Vol.17 刊行のお知らせ

KCIでは、研究誌『Fashion Talks...』を年に一度刊行しています。このたび、最新号となるVol.17「キュレーション」を刊行しました。本号では、展覧会がどのように企画され、何が選ばれ、どのように見せられているのかをテーマに、さまざまな視点からキュレーションについて考えています。KCIの日々の活動ともつながりながら、展覧会にかかわる人々の仕事や取り組み、それを取り巻く社会のあり方を、あらためて考える一冊です。ぜひご覧ください。

研究誌『Fashion Talks...』の  
 詳細はこちら  
<https://www.kci.or.jp/publication/research-journal/>

